

「昭和11年の卒業アルバム」八十田 博人

私の祖母、八十田(旧姓・絹谷)民子は、昭和11年(1936年)3月に、共立女子専門学校を卒業した。それから72年後の平成20年(2008年)4月に、私は共立女子大学に教員として着任した。前年末、90歳で亡くなる直前の祖母に採用されたことを報告できたが、不思議な縁を感じたものである。

祖母の遺品に、昭和11年の家庭科二年二組の卒業アルバムがある。この年の二月、あの二・二六事件が起きた。卒業を間近にした祖母はその日、反乱部隊鎮圧のために雪のなか、九段下に展開していた憲兵隊を見ている。まさに日本が軍国主義一辺倒に転換していく歴史的瞬間だった。

しかし、昭和初期というのは、戦前の文化の爛熟期でもあり、この卒業アルバムの表紙に元号でなく「1936」と西暦で銘が打ってあることから、それが分かる。現在のように写真と文字を同時に印刷するのではなく、遊紙に名前などの文字を印刷した台紙に教員と学生全員の写真が一枚一枚、手作業で貼ってある。写真館に特注した、当時としては大変な贅沢品である。教員も学生も女性はほとんどが和装だが、なかには洋装の人もいる。

お下げ髪の祖母が富山県氷見町(現在の氷見市)の本店のお嬢さんだったように、当時、このような学校に通えたのは、一握りの裕福な家庭の女性だけだった。祖母は親しい友人たちのそれぞれの写真にペンでサインさせている。このようなハイカラな生活を送っていたことは、祖母から聞いた学生時代の話からも想像できる。祖母は初めて聞いたキリスト教の講義に感動して田舎への手紙に書き、返信で「我が家は代々神仏ですから」と叱られ、当時インテリに読まれていた進歩的な雑誌『改造』を持ち帰れば、ことわりもなく家族に捨てられたという。

もちろん、当時の共立は職業学校であり、裁縫教師など当時の女性が就ける限られた職種を目指す教育だった。このアルバムには、講堂で全員が正座して聞く修身の授業を筆頭に、和裁、洋裁、編物、色染、割烹などの授業風景の写真もある。さらに学校行事として、野田醤油(現在のキッコーマンの前身)や所沢飛行場(陸軍管轄、日本初の飛行場)の見学、富士五湖と箱根への修学旅行の写真も納められている。

巻末のクラス名簿には、文字通り北は北海道から南は沖縄まで全国から集まった学生の名前がある。この方々のその後の人生は、祖母がそうであったように、戦争を挟んで、決して楽なものではなかっただろう。しかし、おそらくは、祖母がそうであったように、折々に楽しい学生時代を懐かしく思い出して、生きる支えとしたはずである。

女性を取り巻く環境がはるかに自由になった現在も、世界金融危機に発する就職難など、学生たちには様々な困難がある。この後の人生の支えとなる楽しい思い出を残してやれるか、教師としての私にその責任を感じさせてくれるのが、このアルバムである。

